

大正中期・後期における綴文能力の練磨をはかる 綴り方教材組織論の展開

Evolution of Composition Curriculum for raising child's writing power
—on the middle, latter days of Taisho Period—

前 田 眞 澄

Maeda shinsho

国語教育講座

（平成21年9月29日受理）

はじめに

シュミダー説に触発されて，大正前期に綴文能力練磨をはかる潮流は生まれる。それはその後どのように進展していくのであろうか。その進展のさまを探り，その意義を明らかにすることが，本稿の目的である。

綴る態度の違いに着目して綴る力をつける綴り方教材組織論は，以後次のような展開を遂げる。

- (1) 綴り方本質観・・・大正中期・後期になると，綴り方自己表現観がほとんどの人から発せられるようになる。
- 飯田恒作・・・「児童が眞に吾がものとして居る内容を，眞に吾が物としている形式で如實に発表ができればよい。〈注1〉」
 - 友納友次郎・・・「吾人の期する處は材料の實質であつて，仮令その數は少なくともそれが児童の身體に同化して血となり肉となつて，直接の生活に生きて働いてゐるものでなければならぬ。斯くて文章が児童の発表慾を満足させた眞の自己表現の意味を全うすることが，出来るのである。〈注2〉」
 - 峰地光重・・・「綴り方は児童の人格の全的表現である。〈注3〉」
 - 田上新吉・・・「自己の生活（広義）を對象として綴らうとする作者の人格的生命の創造活動である。〈注4〉」

飯田恒作の規定が典型的なもので，友納友次郎は綴り方が自己表現であることを明言している。峰地光重の立言には，芦田恵之助の綴り方は児童の人生科であるとの見解が反映している。田上新吉の提言には，ベルグソンの創造的進化の考えが入り，自己表現の中でも生命の表現であることが強調されている。大正10年の友納友次郎の見解も，『小倉講演綴方教授の解決』〈注5〉では，芦田恵之助と変わるところがない。

わずかに写生主義綴り方の五味義武が「小學校の程度に於ては文の自己の表現なりとのみ狭く限りたくない。（中略）人格の表現を離れ，創意の境域を脱した普通の記録でも尚且文章といふことが出来る。」〈注6〉と言い，八波則吉が模倣から入って稍創作に近い程度まで導いて戴きたい〈注7〉と希望を述べるにとどまっている。

- (2) 綴り方教授の目的・・・大正中期は，以下のように綴る力をつけることに焦点化したものが，代表的〈注8〉である。

- 飯田恒作・・・「發表力を練る〈注9〉」「文字によって自己の思想を表現する力を養ふ。〈注10〉」
- 友納友次郎・・・「綴方は綴る力をつけるといふことが唯一の目的である。〈注11〉」
- 五味義武・・・「『思想を表彰するの能を養ふ。』という點に立てば，当然綴る力の修練と見るが正當〈注12〉」

ただし，飯田恒作は，芦田恵之助が綴り方の題材として実感の明らかなるものを求めるゆえんを探って

「綴らんとする心」を見いだし、「歌の先生が歌心を養ふやうに兒童に綴らんとする心を養ふのである。」
 「この綴らんとする心を養ふこと——これが自分の考える指導の出発点であり、また到達点である。〈注13〉」
 とも記している。発表力（表現力）養成の大目標に綴らんとする心をいかに取り込むかという課題が生まれている。芦田恵之助に心を寄せる村山四郎三郎などは、順序を逆転させて、「綴らんとする心の培養」を先に、「表現能力の養成〈注14〉」を後にしている。峰地光重は「兒童の全的表現・眞實表現なる綴方によつて彼等の心の芽生えを正しく美しく伸ばして行くといふ人生的意義の上に立つところに、新しい綴方教授の生命が溢れる〈注15〉」と記す。実際には、随意選題によって「思想を練る」ことと課題によって「兒童の模倣力、理解力、感動力等に訴へて、その綴文力を啓培する。〈注16〉」ことを並行させる。しかし、目的としては「小學校令施行規則」にある「思想を正確に表彰させる」という「技能科」としてのとらえ方を批判して、人間形成に資する「人生科〈注17〉」と考えるべきことを提言している。「兒童の全的表現、眞實表現」の中に、当然「綴らんとする心の培養」も「表現能力（綴文力）の養成」も含まれるのであろう。その上、人間的成長を図るものとしているのである。田上新吉は、「自ら更新しつつある子供の内的生活に即して指導を行ひ、以て子供自らが自己の力によつて自己の生活（廣義）を眞實表現し得るような能力傾向をつけてやること、なほ同時にそれによつて子供の内的生活を更に向上發展せしめるやうに仕向ける〈注18〉」ことが目的であるとしている。綴る前の生活の指導→表現力の伸張→綴った後の生活の指導が視野に収められている。東京高師附小の『細目』においては、「綴り方は自己の生活を文にあらはし、自己を生長せしめることを目的とする。〈注19〉」とある。この『細目』の目的も、先の峰地光重の目的も、芦田恵之助の文章観——文章は何のために書くかという兒童の問いに『『綴り方は自己を向上させるためである』といふ一句で安心出来ました。文を綴るといふことは綴らないでは居られぬといふ内部からの要求によつて』『眞剣な態度を以て、作者の人生觀のひらめきを、自己の言葉を以て表現したもので、己れを向上進歩せしめるための人間共通の本能に基づいたものである〈注20〉』——に基づいている。綴る力の育成という目標は、だんだん相對化されてくる。

- (3) 発達段階をふまえた初等綴り方教授への展望…友納友次郎は、大正7年においても「綴り方の技能其の物を確實に吟味してその發達の順序に従ひ、（綴り方教授の系統を）合理的に作製〈注21〉」すべきと説くが、分解の語を避けて自ら発達段階説を目立たないようにしている。五味義武は「自由選題を發表の門戸として出發〈注22〉」するとし、課題指導の領域に分解→総合にかかわる指導項目を内在させる。ただし、経験事項の記述指導を優先するように改めており、肝心の觀察事項の記述指導にしても「觀察以外の事を悉く禁ずるやうな窮屈なことはしない。〈注23〉」と明言する。ここでも分解の語は用いていない。分解→綜合の二期区分は稀薄になる。その後、田上新吉・飯田恒作の兒童文の発達調査が公にされる。田上新吉は作者の態度の違いに着目し、「諸方の學校から寄贈して頂いた兒童の綴り方成績」12,000編あまりを2年かけて2回ずつ読んで「分類し、學年別に統計をとつてみた〈注24〉」という。飯田恒作は大正6年から持ち上がった學級兒童の創作意識の発達（尋3～尋6）と6年間の典型的な作品とを照らし合わせて調査している。そこから田上新吉は芸術的態度においては、主觀的態度か客觀的態度か、同じ主觀的態度であっても直叙か擬人的態度で書かれているかを分けて、統計上何編かずつあったかを尋1から高2までを掲げている。結果的には自由作とは言っても、大正8年春～大正10年7月当時、標準的には全国各地の小學校でどんな指導が行われ、どんな作品が生まれていたかを反映するものになっている。飯田恒作のばあいには、さらに組織的に優中劣それぞれ男女2名ずつを選び、計12名について學年ごとに6年間どのような作品を書いたかを掲げ〈注25〉、考察を加えている。飯田學級の指導の成果をまるごと映し出したものと言えよう。田上新吉・飯田恒作ともにおおよそ2年単位の指導事項を引き出している。

大正11年においても、宮城県師範附小の以下の説のように「兒童の綴文能力を増進〈注26〉」するために、綴る態度に着目して綴る力をつける系列にしたがって、指導の目安を得ようとする人たちはいる。直接には花田甚五郎の綴文能力説に拠ったのであろうが、遡れば、写生主義綴り方や友納友次郎の見解も入っている。

- 第1期（尋1～尋3）…「表現する思想感情を限定し分解する力を養つて行く。〈注27〉」
- 第2期（尋4～尋5）…「選択排列の力を養ふのが主となる。〈注28〉」
- 第3期（尋6・高等科）…「統合力を養ふ事を主たる任務とすべき〈注29〉」

しかし、後に述べるように、大正中期に写生主義綴り方・友納友次郎の綴り方教授系統案に拠り、

分解→総合の二期区分説にしたがったと見られる綴り方教授書が多くあったのに、大正後期にはほとんど姿を消すのである。田上新吉の主観的態度か客観的態度かで文章を分けていこうとする見解には、批判も出される〈注30〉。芦田恵之助の3回の持ち上がり経験から見据えられた2年単位の四期区分説（尋常小学校においては3期にわたる指導目標の見通しを示した説〈注31〉）のみが生き続け、飯田恒作の児童の文章自覚・表現力に関する実証的研究を経て強化されるのである。

- (4) 綴り方教授系統化の原理…綴る態度の違いに着目して綴る力を養う潮流の中では、大正5（1916）年までは、写生主義綴り方の感化が大きい。何と言っても、最初にシュミダー作文教材組織論の生かし方を模索し、綴り方教授細案まで示した点が強みである。

しかし、大正中期以降になると、写生主義綴り方の写真的態度・写生的態度・説明的態度・主観的抒情的議論的態度による記述練習の系統化を継承し、発展させたものは、下記の7編に限られる。

- 1 西武蔵尋常小学校『綴方教授細目 完』同校、大正6〈1917〉年3月14日発行、ガリ版刷り、ページ数を欠く。
- 2 新潟県長岡女子師範学校代用附属川崎小学校『複式學級綴方、唱歌、体操、裁縫教授細目』目黒書店、大正8〈1919〉年3月25日発行、1～22ページ
- 3 兵庫県姫路師範小学校・同附属小学校共編『改訂小學校各科教授汎則』吉岡明輝堂印刷、大正8〈1919〉年10月1日発行、89～197ページ
- 4 五味義武『綴方指導の実際』目黒書店、大正10〈1919〉年3月10日発行、全616ページ
- 5 田上新吉著『生命の綴方教授』目黒書店、大正10〈1921〉年10月25日発行、全660ページ
- 6 茨城県師範学校附属小学校「綴り方教授実際の概要」『綴方教授に關する最近研究』上巻、帝国教育会編、文化書房、大正11〈1922〉年6月2日発行、205～210ページ
- 7 佐久田昌教『藝術活動としての綴方原理』東京宝文館、大正13〈1922〉年6月2日発行、全232ページ

上記①～②は綴り方教授細目まで写生主義綴り方の発表態度に拠るもの。ただし、①は高等科に友納友次郎に従って伝記文、戦記文を加えている。自由作もわりと多い。③は『寫生を主としたる綴方新教授法の原理〈注32〉』を「最も内容の豊富な根本に立ち入った著書〈注33〉」と評価するが、写真的態度と写生的態度と描写的態度を広義の写生的態度に包括し、説明的態度、議論的態度と並ぶ3つの柱に集約している。写生主義綴り方の説く教材配列を念頭に置きつつも、なお、改善の余地を探っていたようである。④は写生主義綴り方の一人五味義武の著作であるが、駒村徳壽の発表態度の区別に拠らず、経験事項の記述練習、観察事項の記述練習、知識事項の記述練習という題材本位の分け方を試みている。⑥茨城県師範附属小学校の教材名がこの五味義武の分類に近いものになっている。⑤田上新吉は写生主義綴り方の科学的・論理的態度に傾斜した系統化を、綴り方本来の芸術的態度を主軸とするものに改めようとする。何に對するどういう態度かで、次の4類に分ける。

- A 自己に対する主観的態度
- B 他者に対する主観的態度（擬人的表現）の指導
- C 他者に対する客観的態度の指導
- D 自己に対する客観的態度の指導

このうち、AとCが現実の視点を取る文章に、BとDとが虚構の視点を取る文章になる。B・Dも是非取り上げるべきだとしたところに、田上新吉の文芸的指向があろう。それと共に、当時の実践傾向もうかがえよう。⑦は、田上新吉の立論を「現下の綴方教授界に於ける最も先進の主張として、吾々に多くの尊敬と共鳴と勇氣とをもたらすもの〈注34〉」とし、田上新吉に則って、「詩文の創作指導」に踏み出している。

それに対して、友納友次郎に拠るものは、下記のようにきわめて多くなる。

- 8 河野清丸監修、自動教育研究会著『自動主義綴方教授の革新』明誠館、大正6〈1917〉年8月15日発行、全209ページ
- 9 友納友次郎講述『綴方教授細目』広島県沼隈郡教育会、大正6〈1917〉年8月15日発行、全92ページ
- 10 氏家丑治郎著『児童の文章力に基ける綴方指導の実際』広文堂書店、大正7〈1918〉年2月15日発行、全288ページ

- 11 友納友次郎著『綴方教授法の原理及實際』目黒書店、大正7〈1918〉年3月発行、全474ページ
- 12 友納友次郎著『尋常小學綴方教授書』6冊（尋1～尋4）、目黒書店、大正7〈1918〉年10月23日発行～大正10〈1921〉年2月20日発行
- 13 大日本図書株式会社編『國語讀本に聯絡せる尋常小學綴方教授書』巻2、大日本図書、大正8〈1919〉年5月25日発行、全267ページ
- 14 池田彌一郎・今井清明共著『綴文能力に基ける高等小學綴方教授細案』積善館、大正8〈1919〉年6月5日発行、全339ページ
- 15 福知勝編著『尋常小學綴方教授細目』大川教育社、大正9〈1920〉年5月27日発行、全268ページ
- 16 峰地光重編著『最新小學綴方教授細目』児童研究社、大正10〈1921〉年8月18日発行、全68ページ
- 17 静岡市小学校「新代の綴方教授」『綴方・話方に關スル研究』（大正9年2月）静岡女子師範学校附属小学校、大正10〈1921〉年10月発行、241～258ページ
- 18 藤枝校楨田彌六稿「我が校ノ綴方方針」『綴方・話方ニ關スル研究』（大正9年2月）静岡女子師範学校附属小学校、大正10〈1921〉年10月発行、296～300ページ
- 19 竹沢義夫稿（富士郡北山尋常高等小学校長）「表現の指導と綴方教授」『綴方・話方ニ關スル研究』（大正9年2月）静岡女子師範学校附属小学校、大正10〈1921〉年10月発行、301～303ページ
- 20 峰地光重著『文化中心綴方教授法』教育研究会、大正11〈1921〉年8月18日発行、全316ページ
- 21 吉田助治著『児童生活の藝術的陶冶と綴方の指導』内外教育社、大正13〈1924〉年6月20日発行、全326ページ
- 22 稲津清市著『生命表現綴方教授細目』尋常科第1学年～第6学年、広文堂書店、尋1・・・大正14〈1925〉年3月10日発行、88ページ、尋3・・・大正14〈1925〉年11月23日発行、104ページ、尋6・・・大正15〈1926〉年5月5日発行、106ページ
- 23 富岡貫一『最近思潮各科學習指導の基調』岡本偉業館、大正14〈1925〉年3月15日発行、141～180ページ
- 24 水鳥川安爾『綴方の自由教育 創作と鑑賞』東京宝文館、大正14〈1925〉年4月20日発行、306ページ
- 25 鈴木頤雄著『魂の深化 綴方指導と其の系統案』南光社、大正14〈1925〉年7月25日発行、245ページ
- 26 佐賀県指定東松浦郡浜崎小学校『綴方指導細目 全』同校、尋1～高等科まで各学年起こしのページがついているが、合計515ページ
- 27 大阪市小学校共同研究会『綴方指導要目とその文例』第1・2学年用、大阪市役所教育部、大正15〈1926〉年3月31日発行、155ページ

9・11・12は友納友次郎自身が練習目的の語を用いて大正前期の主張の体系化をはかったもの。ただし、作文例は三分の二も重複しており、学年を変え、教材系列を改めて示すものもある。したがって、実践の質的変容は見られず、体系化に必要な作文例を補い、聞き書きのように不都合なものが省かれるにとどまる。8は文章を作る心の働きの上から文種によりて仮に分けるというが、綴り方指導要項や教授細目は挙げていない。11も8に近く、綴る態度という用語も出てくるが、実際には文種が原理になっている。10は系統化の原理にはふれていないが、「存在位置状態等についての觀方の指導〈注35〉」や「靜的事物の觀察描寫が出来たならば今度は活動的事物の直觀描寫に移る〈注36〉」とあることから見れば、写生主義綴り方や友納友次郎の見解をある程度取り込んでいると判明する。14は明らかに友納友次郎の発表態度の違いを手がかりにしているが、「練習的記述とその鑑賞」「筆寫力の修練」という教材名を見ると、花田甚五郎からの示唆もあったようである。15・17・18・19は、友納友次郎の説によることを明記している。ただし、17は「想ヲ文ノ上ニ表ハス迄ノ心的経過ノ見地ヨリ綴文能力（内的發表の方面）養成ノ案」および「同上ヲ基礎トシタル推敲批正ノ標準」を加えている。したがって、「文旨／決定／着想／仕方／構想／仕方／記述／態度／推敲／仕方〈注37〉」などの文章表現過程による系統化と友納友次郎の綴る態度の違いに着目した文種との対応の明確な系統化との並行説になる。それに対して、19の「練習教材分類表〈注38〉」（尋2～高2）では、友納友次郎説でありながら、六何法・構成の指導を削り、むしろ文種との対応が可能な面に絞っている。

16・20は、友納友次郎の「教授の系統」表に混在している二側面を見抜き、本来的に綴る態度・文種に

よる系統化を「観たままを書き表すこと」、「感じを抒べること」など7つの「基本的指導教材」とし、一まとまりの生きた思想を扱うものとし、六何法の指導・構想の指導などそこからはみ出た教材を、「物を観ること、特色を捉えること」、「文の組立方」など6つの「付带的指導教材」とし、文話や学年の「草稿及び推敲標準〈注39〉」として掲げている。まだ、東京高師附小の『細目』において取材・腹案・記述・推敲・文話という5観点が見られる以前でもあり、文章表現過程に即した着眼点としては揺れるところもある。それにしても、ここで前者の文章表現活動と後者の文章表現過程という2大原理が統合されるに至っている。むろん、21・22・24・25・26・27は文種もしくは表現態度による記述一本槍である。26のように表現態度の修練7項目は峰地光重のままであり、文集朗読会まで一致する教授細目であっても、独立的文話として掲げるものは峰地光重のように文章表現過程を意識したものにはなっていない。それでも、23には、能力陶冶面として着想方面／構想方面／推敲方面／批評鑑賞方面などが、発表態度方面として峰地光重の挙げた7項目に韻文的発表を加えたものが挙げられている。文章表現活動（後には峰地光重自身、「生活指導の教材」〈注40〉と呼ぶようになる）と文章表現過程（こちらの方は「表現指導の教材」〈注41〉と呼んでいる）と両方を見据えた系統化が徐々になされつつあったのである。

- (5) 綴り方教材の配列・・・写生主義綴り方のように、綴り方教材の配列まで細かく考えていこうとする綴り方教材細目はなくなる。

おわりに

以上のように見てくると、シュミーター作文教材組織論の果たした役割は、以下の5点に集約できよう。

- (1) 綴り方本質観においては、シュミーターは文章構成観であるが、他方経験を想定して一まとまりの文章にして行かせようとする指向も持っていた。したがって、明治40年代に、思想内容・形式・発表という三要素を組み立てて文章を作り上げる文章構成観になじんでいた人たちに、受け止めやすい見方を提供し、日本の初等教育実践者が、大正期15年間をかけて文章生成観もしくは綴り方自己表現観に進むなかだちをしたことになる。
- (2) 綴り方教授の目的に関しては、シュミーターが訳出・紹介される際、判然とせず、槇山榮次が強調したこともあって副次的であった「作文力を練る」ことが指標となる。「小學校令施行規則」に「文章ヲ表彰スルノ能ヲ養」うとあることを背景にし、用語も徐々に綴文能力の養成・練磨に定着して、大正中期に一頂点を迎える。ただし、学習者の内面との関わりが明確でないため、飯田恒作のように一旦綴らんとする心を養うという思いが湧いてくると、綴文能力とどちらが大切か一概には言えなくなる。以後は、綴文能力の語も相対化され、改めて綴り方教授の目的が探求されるようになる。したがって、間接的に「小學校令施行規則」を裏づけ、現場の綴り方教育実践者が本格的な目的追求をしていく契機を作ったと言えよう。
- (3) 発達段階を見据えた初等綴り方教授への展望としては、シュミーターの現実にもるごとと取り組ませるのか個物や二物を選んで取り組ませるかの二分説が、ヘルバルト説の浸透によって分解→統一の2つの時期に分かれる説と解され、明治末期・大正初期に提案され、大正中期に綴文能力練磨と結びつき普及する。しかし、田上新吉がきっかけをなし、飯田恒作が6年かけて児童の創作意識と文章表現力の発達を研究して以降、分解、総合の二期区分説は出てこなくなる。とすると、誤解ではあっても綴る力を練る系列の二期区分などさまざまな試行を生み出し、文章表現力の実証的な発達研究と結びつけて指導の段階を見通すはずみを与えたことになる。
- (4) 綴り方教授系統化の原理については、シュミーターとしては、①心理的な思考力の発展に着目するばあい、②対象と書くべき思想との関係に目を向けるばあい、③文種の展開に焦点を当てるばあい、④詩の活用に留意するばあいという4つの系統化が想定できる。訳語の関係もあって、③の文種のみが推察されるなか、写生主義綴り方が独自に綴る態度の違いによって系統をはかることに踏み出す。しかし、これとてもシュミーターの第Ⅰ～第Ⅳ段階と第Ⅶ段階の区別により、写真的態度による記述練習と写生的態度による記述練習の相違を見つけ出し、整序した可能性が高い。それに対し、友納友次郎は、③の文種を生かす形で綴る態度による記述の再分類を行い、明解なものにしたのである。ただし、総合する時期に、六何法・構想の指導などを独立させている。花田甚五郎・前川宇吉は、写生主義綴り方を素地とした上で、友納友次郎にならって文種との照応をもはかっている。このように、大正初期には創始者でもあり、綴り方教授細案まで示した写生主義綴り方の影響力が大きい、大正中期には明快さで上回る友納友次郎に示唆を得

た文献が圧倒的に多くなる。大正10〈1921〉年に田上新吉が写生主義綴り方の綴る態度の克服を試み、誰に対するどういう態度で臨むかによって4類に分ける。他方、峰地光重は友納友次郎の「教授の系統表」のなかに、一単元としてまとまりのあるものと、一単元とする資格のないもの（六何法・構想の指導など）があり、前者を「観たまゝを書き表すこと」「感じを抒べること」のように文章表現活動で表し、基本的指導教材と呼び、後者を文章表現過程に即して、附帶的指導教材と呼んでいる。そして、この文章表現活動と文章表現過程という二大原理を備えた綴り方教授系統案も、わずかながら発行されるに至るのである。そうしてみると、シュミダーは、提起した11段階説とそこに内包された文種の発展とを通して、綴る態度の違いに着目した系統化を触発し、さらに文章表現活動と文章表現過程の二大原理を統合する土壌を育んだと言えよう。

- (5) 綴り方の教材配列においては、シュミダーの11段階のうちの第1種（第Ⅰ～第Ⅲ段階）の個々の段階の配列に示唆を得る人たちが何人もいた。これらの試行は大正初期にとどまったが、綴り方教材組織論が厳密さを求めていけば、当然ここに行き着くものであろう。それゆえ、シュミダーの役割は、写生主義綴り方や花田甚五郎が一つ一つの段階が綴り方教材配列の基本型をなすのではないかという思いをふくらませ、実際に各学年の教材配列を作り上げる基盤になったところにある。

〈注〉

- 1 飯田恒作『教案中心綴り方教授の実際案』教育研究会、大正6〈1917〉年4月15日発行、52ページ
- 2 友納友次郎『綴方教授法の原理及実際』目黒書店、大正7〈1918〉年3月20日発行、32ページ
- 3 峰地光重編著『最新小學綴方教授細目』児童研究社、大正10〈1921〉年8月18日発行、32ページ
- 4 田上新吉『生命の綴り方教授』目黒書店、大正10〈1921〉年10月25日発行、80ページ
- 5 芦田恵之助・友納友次郎講演、白鳥千代三編『小倉講演綴方教授の解決』目黒書店、大正10〈1921〉年4月20日発行、166、171～174、178ページ
- 6 五味義武『綴り方指導の実際』目黒書店、大正10〈1921〉年3月10日発行、21～21ページ
- 7 八波則吉『創作への道』弘道館、大正10〈1921〉年4月24日発行、61ページ
- 8 芦田恵之助の下記の証言によると、大正6（1917）年前後が綴文能力の練磨が最も主張され、綴り方教育界にも普及していたようである。
「この頃しきりに綴文能力という語が流行して、之をさまざまに分解説明して、その増進を以て成績があがつたとするやうにいひなしてをる。余も大部分はわかつたやうで、なほ獨り心淋しいやうな感がする。たとひ師弟の間柄でも、兒童の心が自分の心のやうに分かるものではない。やうやう兒童の文を綴る結果をたづねて巧みに書いたのを綴文能力が発達したといふ位のものか。所が文（章）は時によつてちがふ。非常にうまく書けることもあり、一向に筆ののびないこともある。その差は決して努力の足らぬのではない。たゞ何とはなしに心の調子が合はぬとでもいふ気分である。余はこれ等を思いあはせて、何を綴り方の成績といはうかと苦心してゐる。」（芦田恵之助稿「小學校に於ける日用文の教授」『小學校』夏季増刊『最近思潮 教育夏季講習録』同文館、大正6（1917）年7月20日発行、186～187ページ）
- 9 『教案中心綴り方教授の実際案』31ページ
- 10 同上書、32ページ
- 11 『綴方教授法の原理及実際』13ページ
- 12 『綴方指導の実際』18ページ
- 13 『教案中心綴り方教授の実際案』141～142ページ
- 14 芦田恵之助序、村山四郎三郎著『綴方教育要領』岐阜県女子師範学校、大正10〈1921〉年8月10日発行、3ページ
- 15 『最新小學綴方教授細目』3ページ
- 16 同上書、6ページ
- 17 同上書、3ページ
- 18 『生命の綴方教授』146～147ページ
- 19 東京高等師範学校附属小学校内初等教育研究会編纂『小學綴方教授細目』培風館、2ページ
- 20 『小倉講演綴方教授の解決』55ページ
- 21 『綴方教授法の原理及実際』146～147ページの間に折り込み。

- 22 『綴方指導の実際』52ページ
23 『綴方指導の実際』239ページ
24 『生命の綴方教授』267ページ
25 飯田恒作著『児童創作意識の発達と綴方の指導書』培風館、大正14〈1925〉年4月25日発行、全447ページ
26 帝国教育界編『綴方教授に関する最近研究』上巻、文化書房、大正11〈1922〉年6月2日発行、177ページ
27 同上書、179ページ
28 同上書、179ページ
29 同上書、180ページ
30 水鳥川安爾が『綴方の自由教育 創作と鑑賞』東京宝文館、大正14〈1925〉年4月20日発行、126～129ページに「児童の文章創作態度の発達傾向」として、つぎのように概観している。
○ 1・2年…主観的傾向が旺盛
○ 3年後半～5年前期…客観的態度
○ 5年後期から…再び主観的傾向
ちなみに、田上新吉の「藝術的規範より見たる児童文の発達」は、下記のように記されている。
「1. 客観的より主観的へ（尋1～尋2・3）
2. 主観的より客観的へ（尋4～尋5）
3. 更に客観的より主観的へ（尋6～高等科）」（『生命の綴方教授』246ページ。括弧は考察者の補足。）
もっとも波線部を強調すれば対立する説になるが、傍線部に力点を置けば同一の見解になる。発達の時期がいくぶん異なるという違いだけかもしれない。
31 『綴り方教授』に記された「尋常科の綴り方通覧」を性格をきわだたせるために、それぞれ「～する時期」として掲げれば、以下ようになる。
○ 尋1・2…「綴るといふ意義を会得させることに全力をそゝぐ」時期
○ 尋3・4…「作者の態度を定め、想の輕重によつて取捨選擇する要領をさとらせることにつとめ」る時期
○ 尋5・6…「着想・結構等を工夫して、有力なる發表の方法を知らせる」時期（芦田恵之助『綴り方教授』育英書院、大正2〈1913〉年3月18日初版発行、大正8〈1919〉年4月10日15版、374ページ）
ここには明らかに綴り方指導の指標（到達目標）として提起されている。
32 駒村徳壽・五味義武共著『写生を主としたる綴り方新教授法の原理』目黒書店、大正5〈1916〉年9月5日発行、734ページ
33 『改定小學校各科教授汎則』169ページ
34 『藝術活動としての綴方原理』154ページ
35 『児童の文章力に基ける綴り方指導の実際』107ページ
36 同上書、113ページ
37 「新代の綴方教授」「綴方・話方ニ關スル研究」248～258ページ
38 「表現の指導と綴方教授」「綴方・話方ニ關スル研究」302～303ページ
39 『最新小學綴方教授細目』6～9ページ
40 峰地光重稿「解決すべき當面の問題」『國語教育』第9巻第3号、主幹・保科孝一、育英書院、大正13〈1924〉年3月1日発行、57ページ
41 同上誌、第9巻第3号、57ページ